バプテストにとって「礼典」とは何か

－　バプテストの「サクラメント」批判：世界に開かれた和解の出来事の広がりの中で　－

これは、西南学院大学の「教会形成と牧師の指導性」のクラスで、牧師の按手（礼）式、バプテスマ、主の晩餐の理解と執行管理の基礎として教えている内容です。

はじめに：「教派」について

「教派とは選択の余地の幅のある信仰の豊かさから由来する私たちの信仰の特徴のことです。それゆえ、教派は自らが相対的存在であることを自覚し、対話に開かれている限りよいものなのです」とある。ここでは、１）「教派」に消極的な評価しかしないエキュメニカルな「教会主義」に対して「教派主義」を取るバプテストの主張が肯定され[1]、２）しかし、「自己の教派を絶対化しないかぎりは」という限定がつけられている。

１．「礼典」を巡る問い

日本バプテスト連盟の、１９７９年の「信仰宣言」では、「教会の礼典として私たちはバプテスマと主の晩餐を守る」と告白している。あるいは、１９４７年の「信仰宣言」にも、項目７のバプテスマと主の晩餐の項で、「しかしてバプテスマは教会の交わりに入る不可欠の礼典である。又我らは主の晩餐を礼典として守り」と告白している。ここでいわれる「礼典」とはどのような意味なのか？

ここで面倒な問題に直面する。バプテスト以外の教派では、「礼典」は「サクラメント」という外国語の翻訳であり、ローマ・カトリック教会は、サクラメントを「秘跡」と翻訳しており、洗礼、堅信礼、聖餐、告解、結婚式、終油、叙階（按手礼）の７つを認めている。正教会ではこれを「機密」と翻訳し、他のプロテスタントでは「聖礼典」と翻訳される。バプテストはこのような「礼典観」を批判して、サクラメントに替わり「Ordinance」（布告、法令の意で主イエスが命じたものということ）という用語を好んで用いたが、これをまた「礼典」と翻訳しているので、問題の所在が分かりにくい。今日、「主の晩餐」のあり方が問われている。陪餐者は教会員のみか、他教派の人で、どこかの教会でいわゆる「洗礼」を受けている人も招くか、バプテスマを受けていなくても、今、イエスを主と信じていれば良いのか、一番の極端は、信仰がなくてもよいという、いやそのような人こそ招かれているという立場の神学者、牧師もいるのである。また、本来、バプテストであれば、牧師が不在時には信徒の晩餐式の司式をすればよいのだが、そのような教会はほとんど皆無と言ってよい。

また、バプテスマもまた問われている。他教派からの成人の転入者の再洗礼（浸礼という形式をどこまで大切にするか）に関して、また、口で告白できない人たちを教会に迎え入れる場合の課題、さらに、病床での滴礼によるバプテスマの是非、バプテスマの低年齢化の問題などである。

以上のような課題を考える際、私たちの「礼典」観が問われるのである。各個教会主義であるからそれぞれバラバラで良いという立場もあるが、他のバプテスト教会に転入会したら考え方が全く違っていたというのも問題である。むろん、日本基督教団の一部の人の言う、「教会秩序の混乱」とは言わずに、バプテストの場合は、「福音理解の豊かさからくる多様性」というのであるが…。

２．　サクラメント理解の歴史

２－１　ギリシヤ語　ミュステリオンのラテン語翻訳の一部としてのサクラメント

サクラメント（英 Sacrament　独 Sakrament）の概念は、全く矛盾はしないまでも、新約聖書の用語法には対応しない「神学的」概念である。 それは ミュステリオン（奥義或いは秘義）のラテン語訳として教会に入り込んできた。ラテン語訳はミュステリオンをすべてサクラメントゥムと訳したのではなく、ミュステリウムとも訳している。２８回のミュステリオンの使用中で、それがキリストの出来事と直結している場合はミュステリウムと翻訳され、そうでない場合に、エペソ１:９、３：３、３：９、５：３２、コロサイ１:２７、Ｉテモテ３：１６、黙示録１：２０、１７：７の８箇所でサクラメントゥムと翻訳された。

２－２　サクラメント概念の変容

宗教的祭儀の領域ではなく、世俗的な法の領域の言葉で、忠誠や義務を言い表す聖なる誓いを意味し、また、それを目に見える形で表現する保証金を指していた。

テルトゥリアヌスは洗礼をサクラメントゥムと呼んだ。しかし、この翻訳により、元来福音宣教と結び付いていたものが、法の領域、世俗的な処理可能性の領域で解釈される道が開かれたのである。

２－３　アウグスチヌスの「しるし」としてのサクラメント理解

アウグスチヌスは、サクラメントを「見えざる神の恵みの見えるしるし」と定義した。問題は「このしるし」が単なる記号のような「しるし」ではなく、背後の神秘にどれだけ預かり、媒介するかである。（プラトン哲学の影響）しかし、アウグスチヌスの場合は、エレメント（物素）と宣教の言葉が結びついていた。問題は、アウグスチヌスは恵みそれ自体を人格的なものというより、ある「事物」として理解したことである。

２－４　中世ローマ・カトリックのサクラメント神学

サクラメントが「目に見えない神の恵みの目に見えるしるし」であるとすれば、この世に存在するものすべてが神の被造物であるゆえ、サクラメントとして理解されることにもなる。そのように無際限に広がったサクラメント理解を上記の７つに限定したのがトマス・アクィナスであった。この伝統は基本的に現代のローマ・カトリック教会においても継承されている。人は弱さを覚える時、神を求め、何かの「しるし」を欲するのだろう。

２－５　宗教改革者たちのサクラメント理解

宗教改革者たちは、キリストの恵みによる救い（信仰義認）を良く現わし、しかもイエス・キリストが明確に命じているものという尺度で、サクラメントを洗礼（嬰児洗礼）と聖餐の二つに集中させた。しかし、ミサあるいは聖餐の理解を巡って宗教改革が分裂していったのである。

３．最近の礼典論の一動向：「原サクラメント」としてのイエス・キリスト

「救いの仲介」とか「サクラメント」という用語、概念を使用することは、私たちバプテストにとって困難を感じさせる。それらは神と各自の主体的キリスト者との間にサクラメントの担い手たる聖職者の仲介することを暗示し、また、バプテスマと主の晩餐を「実体論的」に魔術化する危険性を生じさせるからである[2]。最近は、礼典を礼典足らしめる「原サクラメント」を求める動きがある。ルター：受肉のイエス・キリストが原サクラメントである。カール・ラーナー（RC）教会が原ガクラメントである。モルトマン：世界に働く三一の神の歴史こそ原サクラメントである[3]。

モルトマンのこのようなサクラメント理解は礼典の問題を単に個人の問題、教会内、教会間の「秩

---

[2]

[3] E.Juengel/K.Rahner, Was ist ein Sakrament?　1971.　J. Moltmann, **Kirche in der Kraft des Geistes**. 1975.

序」の問題として、しかも過去の想起としてだけ理解するのではなく、より広い地平の中で、救いの完成の未来に方向づけられた把握を与えることを可能にする。K.　バルトは彼の最後の著作　『和解論』IV/4 の洗礼理解においては、水のバプテスマを霊のバプテスマから峻別し、水のバプテスマを、世におけるキリストの働きへの教会的、人間的応答であり、参与であるというキリスト教倫理的側面を強調することによって[4]、ツヴィングリ、あるいはバプテストのバプテスマ理解に近づいている。ローマ・カトリックの 7 つのサクラメントを２つに集約した大方のプロテスタントもどこかローマ・カトリックの礼典理解を引きずっているので（嬰児洗礼の肯定など）バプテストと他のプロテスタンの間にも、「礼典」を巡って見解の相違が存在しているといえよう。

４．バプテスマと主の晩餐

もしみ霊におけるキリスト、世界に働く三一の神の秘義が唯一の根本的サクラメントであり、礼典が終末論的希望、宣教論的文脈において理解されるならば、ユンゲルは、バプテスマと主の晩餐はこの唯一の根本的サクラメントにあずかる２つの祝い（die beide Feiern）であり、それはこの世界に与えられた唯一のサクラメントの「世界性を証言する祝い」である[5] と提言する。

しかし、お祝いだから「誰でも」というのではなく、バプテストは神の一方的な恵みへの「応答」を重視してきた。バプテスマは、聖霊によって働くイエス・キリストの罪と死の力から解放する歴史に参与するようにとの招きなのである。

バプテスマはまさに「義の武器」として生きる（ローマ６：１３）「宣誓式」であり、「派遣式」なのである。主イエスが公生涯の最初にヨハネからバプテスマを受けたように、キリスト者が召されることは各自の救いの出来事であるだけでなく（ローマ６：３－１０）、勝利が約束はされているが、依然として破れている世界の中でキリストと共に、キリストの戦いに召されることなのである。

主の晩餐はＥ．シュヴァイツーによれば過去、現在、未来の３つの要素があるという[6]。主イエスが罪人と呼ばれた者たちや貧しい者たちとともにあずかった終末論的祝宴の先取りの食事（マルコ２：１３－１７）と十字架の死を前にして弟子たちと共にした最後の晩餐（マルコ１４：２２－２５）の出来事を「思い起こすこと（記念する）」、また、復活後の主が弟子たちと食事をともにしたように（ヨハネ２１：９－１４、この後にペテロへの宣教の委託が記録されている）、今現在ここに生きておられる復活の主との交わりと宣教への派遣の確認（同時に信仰者の交わりの確認）、そして、「マラナ・タ」と祈る終末論的希望（Ｉコリント１６：２１、１１：２６）である。主の晩餐はバプテスマと同様に、「信仰契約共同体」の確認、世界への派遣使命（mission)に結び付けられる。

５．礼典を考える文脈：終末論的、宣教論的文脈の中で

バプテスト教会の信仰の特徴は、神の恵みの業が信仰の応答を創造することを強調するところにある。つまり、イエス・キリストにおいて現わされた一方的な神の恵みに応答する私たちの信仰、応答責任性を絶えず問い続けるところにあり、この神と人との「出会い」を常に第一のものとして確立していこうとする主体的、実存的信仰にある。避けるべきは、キリスト者の「特権化」である！

---

[4] K. Barth, KDIV/4. **Die Taufe als Begruendung des christlichen Lebens**, 1967. 天野有訳『キリスト教的生 I, II』。

[5] Juengen, op. Cit., 36, 59.

[6] E. Schweizer, **The Lord's Supper according to the New Testament.**